

授業概要

科目名		失語症Ⅲ						授業の種類	演習	必修・選択		必修
授業回数	15	回	時間数	30	時間	1	単位	配当学年時期		2年	後期	
【授業の目的・ねらい】 失語症について医学的観点からその基礎となる領域について学び、この後の言語治療に役立てることができる。臨床現場における言語治療の進め方を把握し、言語訓練の技法や心理的側面へのアプローチ法などを習得できる。												
【実務者経験】 幸生病院、ドレミリハビリテーション、機能訓練教室等にて、言語聴覚士として失語症治療に従事。												
【授業全体の内容の概要】 失語症と周辺の言語障害等について、症例検討を含めた演習を通して臨床に向けた基礎的な知識と技術を身につける。 症例報告書の作成手法を理解できる。												
【授業終了時の達成課題（到達目標）】 言語治療において大切な観察能力や情報収集能力を養い、失語症者の心理・社会的背景を把握することができる。検査・評価・教材作成などの一連の作業を通して失語症者に適した訓練法を見出し、有効なコミュニケーション手段を考えることができる。												
回数	講義内容										準備物(教材)	
1	実習報告を通して今後の課題を見つけることができる。											
2	失語症(古典分類, 純粋型, 皮質下性, 特殊な失語)について理解できる。											
3	症例Ⅱを用いて症例報告書の作成ができる① また症例に則した国家試験対策問題を解くことができる。											
4	症例Ⅱを用いて症例報告書の作成ができる② また症例に則した国家試験対策問題を解くことができる。											
5	症例Ⅱの症例報告会を通して質疑応答への対応力を養うことができる。											
6	認知神経心理学的情報処理モデルの復習を通して情報処理の流れを理解できる。											
7	失語症の言語治療理論と技法による具体的提案と教材を知ることができる。											
8	失語症者(症例Ⅲ)をモデルケースとして言語面・医学面・生活面・社会面からの情報収集ができる。											
9	失語症者(症例Ⅲ)をモデルケースとして失語症検査を実施し、言語症状などを把握することができる①											
10	失語症者(症例Ⅲ)をモデルケースとして失語症検査を実施し、言語症状などを把握することができる②											
11	失語症者(症例Ⅲ)をモデルケースとして失語症検査の結果を確認し、プロフィールを作成することができる。											
12	失語症者(症例Ⅲ)をモデルケースとして言語療法初期評価報告書を作成することができる。											
13	長期目標・短期目標・訓練内容及び手順などを含めた訓練プログラムの立案ができる。											
14	訓練計画に基づく教材作成ができる①											
15	訓練計画に基づく教材作成ができる②											
	定期筆記試験											
【使用教科書・教材・参考書】 『標準言語聴覚障害学 失語症学』医学書院 『標準失語症検査SLTAマニュアル												
【準備学習・時間外学習】 日々の予習復習及び検査練習、訓練計画、教材作成などの準備作業を必要とします。												
【単位認定の方法及び基準（試験やレポート評価基準など）】 試験の結果を100点満点として成績を評価する。 定期試験70点、小テスト10点、課題の評価20点として合計100点とする。 60点以上の場合に科目を認定する。												